



TITLE:

資本の生産力 - 『資本論』を素材
として -

AUTHOR(S):

梅垣, 邦胤

CITATION:

梅垣, 邦胤. 資本の生産力 - 『資本論』を素材として -. 経済論叢 1979,
123(6): 395-410

ISSUE DATE:

1979-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/133774>

RIGHT:

京都大學經濟學會

資本の生産力

——『資本論』を素材として——

梅 垣 邦 胤

はじめに

本稿は、「資本の生産力」という問題がマルクス経済学の古典にあってはいかに位置づけられていたかについて、その主要素材を『資本論』にもとめ若干の整理を行なうものである。資本制的生産関係のもとで、人間と自然の物質代謝を媒介するものとしての労働、その生産力はいかなる態様をえるのか、このような問題を一方で念頭におきながら『資本論』などを改めて見直すこと、それが本稿の直接的課題である¹⁾。

ところで——若干行論を先どりする形でのべれば——「資本の生産力」という問題を一方で意識しながら『資本論』などを読みかえた場合、そこに「資本の生産力」とかかわってたびたびでてくるのが、人間自然、社会的自然力、自然そのもの、あるいは無償の生産力、無償性といった概念である。その詳しい内容は後にまつよりほかないのであるが、マルクスは、生産力といった場合、

- 1) 生産力概念を明確にしながら『資本論』研究を行なうことの重要性を述べた先達に内田義彦氏がある。氏は『資本論』研究の指針として、生産力というものを一方の念頭におきながらの生産関係把握というものをあげ次のように言う。「生産力と生産関係の矛盾を経済学を使うことでどう具体的に把えるかに『資本論』のテーマがある。そういうものとして『資本論』を読まなければならない。生産力という概念を常に明確に保持していなければ、生産関係という概念は宙に浮いてしまう。」内田義彦『資本論の世界』岩波新書、1966年、83ページ。傍点は引用者。内田氏は、このように、生産力を重視し、とりわけ「相対的剰余価値」論の意義を浮彫りにしたのである。なお生産力を技術という視点から検討したものとしては、とりあえず以下の文献を参照されたい。芝田進午『科学＝技術革命の理論』青木書店、1971年。中村静治『技術論論争史』上・下、大月書店、1975年。同『現代日本の技術と技術論』青木書店、1975年。加藤邦興「唯物論研究会初期の生産力論論争」大阪市立大学商学部経営研究会『経営研究』第28巻第3号、1977年9月。また最近の「生産力」問題について的一端は以下。後藤邦夫「現代の“生産力問題”とマルクス主義」『経済評論』1978年11月号。

たんに技術等といったものにとどまらず、資本制生産と人間の自然力、社会的自然力、自然そのものとの相関、あるいはそれとのかかわりでの無償の生産力といったものを視野におさめる作業を行い、よって、資本制生産の歴史的制約性を剔抉する一契機としていられる。一見ごくありふれた「資本の生産力」といったテーマを本稿で改めてとりあげた根拠もここにある。

順序は以下である。第一章では、本題にはいるにあたってのさしあたっての基礎作業として、「資本の生産力」という概念について若干の検討が行なわれる。そしてそこでは、人間と自然の物質代謝＝労働が、資本の生産力に包摂されていく過程における、人間自然および自然そのものの位置の転変といったものがふれられる予定である。第二章では、資本の生産力における、人間の自然力あるいは労働力的側面、もし経済的形態規定の枠内での言い方が許されたとすれば、可変資本的側面がとりあげられる。ここでは、先の無償の生産力というものの諸契機が姿を現わすはずである。第三章では、「資本の生産力」という場合、第二章の可変資本的側面と一対になっている生産力のもう一つの側面、自然そのもの、自然力、あるいは自然から加工されたものとしての生産手段、不変資本的側面がとりあげられる。

I

本章の目的は、後に続く章の前提として、「資本の生産力」の概観についてさぐりだすことである。そのさい、とりわけ資本の生産力と人間および自然の相関といったものを意識すれば、さしあたってあらわれてくるのは、人間と自然の物質代謝としての労働、生産関係を捨象されたものとしての「労働」である。いかなる生産関係にも共通する基礎過程、したがってまた生産関係を捨象された次元で把握された労働においては、人間と自然は、いわば1対1という関係で相対する一つの対概念としてあらわれ、その内部においても、人間による自然の加工と自然による人間の加工といった、労働によって媒介される交互作用としてあらわれる²⁾。このように見た場合、あるいは一見資本の生産力と

の懸隔がありすぎるような印象を与える。しかしながら、後の行論を意識して言えば、この労働という次元において、抽象的に述べられた人間と自然は、一つには、資本制的生産関係の対極に位置する「素朴な」代謝活動として、また一つには、資本関係による特有の変型をうける以前の段階における自然の加工と人間の加工として、その限りにおいては、一定の具体性をもった内容を獲得しているのである。『資本論』では、労働につき、とりわけ、人間の加工という点につき、人間は「自分自身の自然」を変化させるという形で述べている。「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。……。人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然 (*seine eigene Natur*) を変化させる。」⁹⁾

以上が、労働、人間と自然としての資本の生産力にかかわる端初の考察である。つぎに、この人間と自然がもつ一面の抽象性を一歩克服し、資本の生産力に向って一段の具体化をはかるものが『資本論』にあっては「労働の生産性」という概念である。引証を後まわしにし、その概略をのべれば、ほぼ以下の内容で労働の生産性はつかまれている。その第一の内容は、先の人間と自然、労働においては、単に一对一、人間対自然という形でべられていたこの同じ人間と自然が、もはや即自的な対概念としてではなく、「労働の生産性」を構成する二つの契機という位置に転化していることである。『資本論』では、この点については、まず労働の生産性は、「自然条件」によって定められるとした上で、この「自然条件」の内容として、先の人間および自然とのつながりにつ

-
- 2) 人間と自然の物質代謝に關説したものとしては、さしあたり以下の文献を参照されたい。
 Alfred Schmidt, *Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx*, Europäische Verlagsanstalt, 1971年、邦訳『マルクスの自然概念』元浜清海訳、法政大学出版局、1972年。向井公敏「『経済学批判要綱』における人間と自然」山田鋭夫・森田桐郎編著『講座マルクス経済学』7、コメンタール『経済学批判要綱』(下)、日本評論社、1974年、所収。玉城哲『風土の経済学』新評論、1976年。玉野井芳郎『エコノミーとエコロジー』みすず書房、1978年。山田鋭夫「日本のマルクス経済学の現段階」『経済評論』1978年11月号。
- 3) Karl Marx, *Das Kapital Kritik der politischen Ökonomie*, Karl Marx=Friedrich Engels Werke (以下、M. E. W. と略) Dietz Verlags Berlin, Band 23, S. 192, 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第23巻 a, 234ページ。なお、以下『資本論』については、原文巻数、原文ページ数、邦訳巻数、邦訳ページ数という形で示す。

いて「人間そのものの自然」および「人間をとりまく自然」という形でとりあげている。労働の生産性についての第二の内容は、自然条件の二つの内容のうちの後者、すなわち「人間をとりまく自然」にかかわって、それがさらに二つに分けられている。一つは直接的な生活手段であり、他は労働手段である。ここでは、生活手段、労働手段につき、それらはともに「自然の富」であるという規定が与えられている。最後に、今度は、生活手段および労働手段としての「自然の富」を歴史性の中でとらえなおし、歴史は、生活手段としての自然の富から、労働手段としての自然の富に重点移行をはかる一過程であるとされる。「社会的生産の姿が発展しているかいないかにかかわらず、労働の生産性 (*die Produktivität der Arbeit*) はつねに自然条件に結びつけられている。これらの自然条件は、すべて、人種などのような人間そのものの自然 (*Natur des Menschenselbst*) と、人間をとりまく自然とに還元されうるものである。外的な自然条件は経済的には二つの大きな部類に分かれる。生活手段としての自然の富……と、労働手段としての自然の富……とに分かれる。文化の初期には第一の種類の自然の富が決定的であり、もっと高い発展段階では第二の種類の自然の富が決定的である。」⁴⁾ 傍点は引用者。

この「労働の生産性」においては、とりわけ、人間対自然が、生産性を構成する人間と自然というものに転生している点において一歩具体化されている。しかし他方では、引証において明白にあらわれているように、いまだ社会構成体とのかかわりというより、一般的な歴史過程における労働の生産性がのべられている。労働の生産性と同じ系列に属しながら、したがってまた生産関係は同じく捨象したままで、「労働の生産性」をより資本主義に近い、あるいは資本主義そのものとかかわりで再規定したものが「労働の生産力」である。それは、人間の自然力としての労働力の質、科学・技術、個別的人間の相互関係としての社会的結合、生産手段の規模および水準、人間をとりまく自然そのものによって規定されるものであり、これらの諸契機における、労働力、社会的

4) Bd. 23, S. 535, 23 b, 664ページ。

結合、生産手段の規模、人間をとりまく自然などは、続く二・三章においてとりあげられる資本の生産力——人間の自然力——社会的自然力——自然そのものの——無償生産力などと直接の関連をもつものである。「労働の生産力 (*der Produktivkraft der Arbeit*) は多種多様な事情によって規定されており、なかでも特に、労働者の技能の平均度、科学とその技術的応用可能性との発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模および作用能力によって、さらにまた自然事情によって、規定されている。」⁵⁾

以上、資本の生産力に接近する前提的諸段階として、労働——労働の生産性——労働の生産力という系列を追ってきた。そして、くりかえすまでもなく、人間自然、社会的結合、生産手段の規模、人間と自然の労働の生産性を構成する二つの契機への転生等は、前提的諸段階とはいえ、後にひきつがれるべき概念である。しかしまた、資本の生産力というテーマから見れば、もともと資本制生産様式においては、一方では生産力の豊かな発展を実現しながら、他方でそれが資本・賃労働関係によって実現されたものであるが故に、資本を捨象された単なる「生産力」ではなお全体として抽象的段階にとどまっている。そしてまた、生産関係を入れてこないで、労働、労働の生産性、生産力の考察といったものは——たとえ生産関係の規定性をうけた形でのちに再現してくるものがあるとしても——なおいまだ一面性の謗りをまぬがれず、経済学の対象としては不十分性をもっていると思われる。『経済学批判要綱』においては、この点につき、労働の生産性を構成する人間自然あるいは自然そのものは、全生産関係に共通するものであり、それらは「形態諸関係」との一定の関係におかれた場合に、はじめて経済学の対象に入ってくるとしている。「富の素材は、それが労働のように主体的であろうと、あるいは自然的または歴史的欲望の充足のための対象のように客体的であろうと、ひとまずすべての生産時代に共通なものに現れる。したがってこの素材はさしあたりたんなる前提として現れて

5) Bd. 23, S. 54, 23 a, 54ページ。なお労働の生産力についてのより詳しい指摘は、『賃金・価格・利潤』において行なわれている。K. Marx, Lohn, Preis und Profit, M. E. W., Bd. 16, S. 126-27, 邦訳、『全集』16, 125ページ。

おり、経済学の考察の外にあり、それが形態諸関係によって変形されたばあい、あるいはその形態諸関係を変形するものとして現れるばあいに、はじめて考察の範囲にはいつてくる。⁶⁾ 傍点は引用者。

今までの展開における一面の抽象性に強いられ、ここにはじめて資本の生産力があらわれてくる。そしてまた、ここにはじめて、いわゆる「生産力」も生産関係の規定性をうけたものとしてあらわれてくるはずである。

資本の生産力とは何か、それを見ることがさしあたっての課題であるが、その際、いままでの段階と比較しての一つの特徴は、人間と自然、人間労働と労働手段が、もはや「素朴な」姿を一見失い、経済的形態規定をうけてあらわれるということである。労働における人間対自然、労働の生産性における人間と自然、これらは、資本の生産力においては、もはや、内実そのままだがあらわれず、資本に属する二つの「物」という形態規定をうけてあらわれる。労働過程は、ただ自分が買った労働力という商品の消費でしかないのであるが、しかし、彼は、ただそれに生産手段をつけ加えることによってのみ、それを消費することができるのである。労働過程は、資本家が買った物と物とのあいだの、彼に属する物と物とのあいだ (*zwischen ihm gehörigen Dingen*) の一過程である。⁷⁾

資本の生産力においては、労働における人間と自然は、資本に属する二つの「物」となる。その結果、両者の交互作用は、すでに交互作用に入るまえに分裂し、「客体的な富」は、資本に、「主体的な富」は、客体的富がすでに資本に転化しているという前提のもとにおいては、それとの直接的融合を阻止され、たんに抽象的な富（一つの物）として存在するにすぎなくなる。いうまでもなく、これが、人間自然の質労働としての定置である。ここに、資本の生産力として、先の『要綱』における、主体的および客体的、この二つの富の素材の

6) K. Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857-58, Dietz Verlag Berlin, S. 736, 邦訳『経済学批判要綱』高木幸二郎監訳、大月書店、IV, 819-20ページ。
以下『経済学批判要綱』については、“Gr”原文ページ数、『要綱』邦訳巻数、邦訳ページ数という形で示す。

7) Bd. 23, S. 200, 23 a, 243 ページ。

「形態諸関係」による「変形」が行なわれる。「労働者自身は絶えず客体的な富を、資本として、すなわち彼にとって外的な、彼を支配し搾取する力として、生産するのであり、そして資本家もまた絶えず労働力を、主体的な、……抽象的な、労働者の単なる肉体のうちに存在する富の源泉として、生産するのであり、簡単に言えば労働者を賃金労働者として、生産するのである。」⁸⁾ 傍点は引用者。

以上見られるように、「資本の生産力」は、人間と自然、労働の生産性、労働の生産力を、資本制生産関係を媒介として、資本に属する「物」として資本の下に包摂したものである。最初に、若干の先どりという形で、資本の生産力と人間および自然（自然が加工されたものとしては、労働手段、生産手段）とのかわりが、考察の一軸点であると述べた。資本の生産力を、ごく概括的にたどっている本章においては、このかわりは、一般的に——したがって無償の生産力といった契機は入れずに——資本・賃労働関係、この同じ関係が、資本および賃労働（あるいは人間と自然）に与える対極的性格とし、位置づけられる。一方における資本。労働の生産性、生産力が資本の生産力に転生したという前提のもとにおいては、人間と自然の物質代謝、労働の成果は、また生産性の高揚は、その源泉がすでに「物」としてあらわれているが故に資本に属する。転生の結果としての剰余価値および利潤の定置である。「利潤率をつうじての移行によって剰余価値が利潤という形態に転化させられる仕方は、すでに生産過程で起きている主体と客体との転倒がいっそう発展したものであるにす

8) Bd. 23, S. 596, 23 b, 743 ページ。

9) Bd. 25, S. 55, 25 a, 56 ページ。なお、剰余価値—利潤は、剰余価値—利潤—超過利潤という系列でもつかみうる。『資本論』では、先にあげた労働の生産性の諸契機を、資本一般のレベルにおいて、資本関係による転生をうけたものとしては、剰余価値および利潤の源泉として、さらに、個別資本の契機をいれた段階においては超過利潤の源泉としてつかんでいる。「ある個別資本が実現する超過利潤は……次の二つの事情のどちらかによるものである。すなわち……労働の生産力を高くする一般的な諸原因（協業や分業など）が……より高い程度、より大きい強度で作用することができるという事情か、または……平均水準をこえた生産手段や生産方法が充用されるという事情によるものである。」(Bd. 25, S. 657, 25 b, 831 ページ)なおこの点に関する論争についてはさしあたり、大内秀明・桜井毅・山口重克編『資本論研究入門』東京大学出版会、ノ

ぎない。」⁹⁾ 傍点は引用者。他方における賃労働、および人間と自然。人間が賃労働、物という形態規定をうけた段階では、そして資本にとっての剰余価値と利潤の源泉となった段階では、物質代謝の過程は、もはや、自からが自然を変化させ、自からも変化してゆくものとはならず、労働手段、生産手段は、「馬」にとっての「くつわ」や「手綱」と同じものとなる。ここに「浪費」への傾向があらわれる。「この搾取手段が相対的に安くつこうが高くつこうが労働者にとってどうでもよいのは、ちょうど馬を御するくつわや手綱が高かろうと安かろうと馬にとってはどうでもよいようなものである。……もし彼がその節約を強制されていなければ、その浪費は彼にとってまったくどうでもよいことであろう。」¹⁰⁾そして同じく剰余価値と利潤を生み出す対極において、労働によって媒介される人間と自然、労働の生産性を構成する二つの契機としての人間と自然には破壊・疲弊が帰結される。「工場労働の制限は、イギリスの耕地にグワノ肥料を注がせたのと同じ必然性の命ずるところだった。一方の場合には土地を疲弊させたその同じ盲目的な略奪欲が、他方の場合には国民の生命力の根源を侵してしまったのである。」¹¹⁾

以上、本章では、資本の生産力を、労働（人間対自然）→労働の生産性（人間と自然）→労働の生産力（労働の社会的結合、生産手段の規模、自然等）→資本の生産力という形で、一面では抽象から具体への進展として、他面では、資本の生産力にいたるまでの諸契機の資本の生産力における「保存」「変形」として述べてきた。それでは、資本は、このごく一般的に述べられた生産力を、はじめにふれた人間の自然力、社会的自然力、無償の生産力とのかかわりでどのようにより具体的にひきだし、自からには剰余価値・利潤を賃労働

1976年、109-111ページ参照。また、拙稿「超過利潤論」京都大学経済学会『経済論叢』第121巻第4・5号、1978年4・5月参照。

なお「地代論」において、同じく「土地的自然力—労働生産力—資本生産力」という系列に触れたものとして、碓正夫「剰余利潤の自然的基礎としての自然力」（大阪商科大学『経済学雑誌』第20巻第4・5号）がある。

10) Bd. 25, S. 95-6, 25 a, 107-08ページ。

11) Bd. 23, S. 253, 23 a, 310ページ。

働（人間自然）には荒廃をもたらすのか、それを次に見よう。

II

資本の生産力をより具体的に、今もしそれを資本の「生産過程」を構成する二つの契機、すなわち、可変資本的側面と不変資本的側面に分けるならば、その二つの契機をそのまま順次的考察の二つに区別される内容とし、不変資本的側面については次章にゆずり、本章では、可変資本的側面についてふれてゆきたい。そして、ここではじめて「無償の生産力」が姿をあらわすはずである。それは『資本論』では、さしあたっては、労働力の価値（可変資本）および労働力の使用価値・労働とを区別することのかかわりででてくる。

すなわち、マルクスは、まず一方において、労働力——人間という関連で労働力を見、「ポッター」の言葉をかりて、労働力——人間を「生きている機械」とし、本来の機械を「死んだ機械」とし、両者の対比のなかで、後者は「毎日」損傷してゆくのに対し、「生きている機械」は「改良」されるとし、労働力——人間の、いわば一種の潜在力について触れる。「綿業工場主たちのえり抜きの代弁者ポッターは、「機械」の二つの種類を区別している。それはどちらも資本家のものであるが、……一方は生命がなく、他方は生きている。生命のない機械は、毎日損傷して価値を失ってゆくだけではなく、その現に存在する大群のうちの一大部分が不断の技術的進歩のために絶えず時代遅れになってゆき、わずかに数カ月でもっと新しい機械と取り替えることが有利になることもある。反対に、生きている機械は、長もちがすればするほど、代々の技能を自分のうちに積み重ねれば重ねるほど、ますます改良されてゆくのである。」¹²⁾傍点は引用者。生きている機械——賃労働——人間——改良という形で、明らかにここには人間の潜在力が暗示されている。人間の潜在力につき、さらに『資本論』では、「弾力的な人間的自然的制限」という表現を与えている¹³⁾。

12) Bd. 23, S. 601, 23 b, 750ページ。

13) Bd. 23, S. 425, 23 a, 526ページ。なお恐慌論という視角からこの「弾力性」についてふれ、

このように人間のもつ「ますます改良」されるという側面、弾力性という側面を一方におき、他方に、資本の生産力は、資本には、剰余価値・利潤を、人間自然には荒廃をもたらす、という前章でふれた系列をおけば、又ここに労働力の価値と使用価値の区別をおけば、資本にとっての「無償の生産力」というものがでてくる。潜在力をもち弾力性をもった人間が賃労働者として、資本の下に包摂されるとき、すなわち、労働力の価値実現、賃金取得を媒介にして、労働力の使用価値が資本の下に包摂されるとき、資本は、人間——賃労働の潜在力、弾力性に依拠して、労働力の価値からは一定独立した、人間の自然力を、資本の生産力とする。「彼の労働の価格は彼の労働力の価値によって、つまりその生産費によって規定されているが、他方、この労働力の行使は、緊張や力の発揮や消耗として、他のどの賃金労働者もそうであるように、けっして彼の労働力の価値によって限定されてはいない。」¹⁴⁾そして「ある限界のなかでは、資本によってしばり出されうる労働の供給は労働者の供給には依存しないものになる。」¹⁵⁾ 14), 15)とも傍点は引用者。さらに、『資本論』では、この点につき「生産的な潜勢力」¹⁶⁾と規定している。ここには、人間がその内に潜ませている弾力性が資本・賃労働関係を媒介として、資本の「生産的な潜勢力」に転化され、資本は「支払わない」利潤源泉を開拓していくという形で資本の「無償の生産力」というものが暗示されている。

「無償性」が明示的にあらわれるのは、価値増殖過程における、労働による不変資本の価値維持力としてである。すなわち、価値増殖過程においては、生産手段と労働力が合体されることにより、労働の抽象的側面においては、新価値が対象化され、具体的側面においては、生産手段の価値が移転＝維持されるが、労働（その具体的側面）における価値の移転＝維持は、資本にとって「無

たものとして、川鍋正敏「機能している資本の弾力性」と“資本の膨張力”（一橋大学『経済研究』第19巻第1号、1968年1月）がある。——この文献を示唆していただいた角田修一氏に紙面をかりて謝意を表したい。

14) Bd. 25, S. 311, 25 a, 375ページ。

15) Bd. 23, S. 323, 23 a, 401ページ。

16) Bd. 24, S. 357, 24, 436ページ。

償」なるものである。この点につき『資本論』等では、次の三つの内容としてつかんでいる。一つには、使うことによる維持（この「使うこと」＝「維持」という一見奇妙なとらえ方の意味はすぐ以下で明らかになる）それは労働がもつ「無償の天資」である、と。「労働過程での使用によって行なわれる維持は、生きている労働の無償の天資（*Gratisnaturgabe*）である。」¹⁷⁾次には、この維持という「労働の自然力」は、「資本の自己維持力」に転化する、と。「新価値を創造しながら元の価値を維持するということは、生きている労働の天資である。……。このような労働の自然力は、労働が合体されている資本の自己維持力として現れる」¹⁸⁾傍点は引用者。最後に、「無償」性が、『要綱』では、価値維持力の無償性を剰余労働と同一レベルで位置づけている。「もとの価値の維持を、資本家は剰余労働と同様に、無償で受けとる。」¹⁹⁾傍点は引用者。

このような労働による価値維持力というものは、いわば当然のことであり、とりあげるに及ばないように見えるかもしれない。しかしそうではない。もしここに、産業循環、好況と不況というものを入れてくれば、その不況局面においては、無償の無償であることの価値が——それが失われることによって——姿を現わす。「景気のよいあいだは、資本家は利殖に没頭しきっていて、労働のこの無償の贈り物が目に見えない。労働過程のむりやりの中断、すなわち恐慌は、彼にこれを痛切に感じさせる。」²⁰⁾生産手段は放置されることにより腐朽する。「天候と腐朽の自然法則とは、蒸気機関が回転をやめたからとて、その作用を中止しはしない。」²¹⁾

これまで、一つには、人間自然の弾力性を前提とし、労働力の価値と使用価値の区別を媒介にした資本の潜勢力、また一つには、労働の具体的側面による生産手段の価値の維持、資本の価値維持力といった内容で、資本の「無償の生産力」を追ってきた。しかし資本が「支払わないで」取得するものは、これら

17) Bd. 24, S. 173, 24, 211ページ。

18) Bd. 23, S. 633-34, 23 b, 791ページ。

19) "Gr" S. 262, 『要綱』Ⅱ, 280ページ。

20) Bd. 23, S. 221, 23 a, 270ページ。

につぎるものではない。資本制生産様式が、以前の生産様式と区別される特徴の一つが、「人口の分散状態の解消」「人口の密集」「生産手段の集中」²²⁾にあるものとするならば、今までの段階においては、いわば「集団労働」といったものについては全くふれておらず、したがって資本の生産力、「無償の生産力」といっても一定の抽象性をもっていただけと思われる。そこで以下、この集団労働とのかかわりで資本の生産力、「無償の生産力」をとりあげたい。これはさしあたっては「人口の増加」という形であらわれる。『要綱』では、人口の増加そのものを「支払われない」「労働の自然力」「社会的労働の自然力」と規定している²³⁾。人口の増加＝社会的労働の自然力を端初的契機、背景として、集団労働における生産力、『資本論』相対的剰余価値論で言えば、協業および分業とマニファクチュアにおける生産力が姿をあらわす。

協業における労働の生産力、それは即自的には協業、密集そのものの中に存在する。『資本論』では、この点、個体的限界からの脱出＝種属能力の発揮としている。「結合労働日の独自の生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力なのである。この生産力は協業そのものから生ずる。他人との計画的な協働のなかでは、労働者は彼の個体的な限界を脱け出て彼の種属能力を発揮するのである。」²⁴⁾傍点は引用者。労働の社会的生産力、種族能力の発揮としての協業の生産力は、さらに、労働者の相互刺戟、相互競争としてたかめられる。「たいていの生産的労働では、単なる社会的接触が、競争心や活力の独特な刺激を生みだして、それらが各人の個別的作業能力を高める。」²⁵⁾

それでは、協業を土台とし、その中に分業がもちこまれるならば、協業の生産力に加えるに、いかなる内容の生産力が新しく生まれるか。作業場内分業というものが、労働の組織化と、作業場内における労働の計画的配置を可能にし、

21) Bd. 23, S. 221, 23 a, 271ページ。『タイムズ』よりの引用。

22) Karl Marx, Friedrich Engels, Manifest der Kommunistischen Partei, M. E. W., Bd. 4, S. 466-67, 『全集』4, 480ページ。

23) “Gr” S. 304, 『要綱』II, 328ページ。

24) Bd. 23, S. 349, 23 a, 432ページ。

25) Bd. 23, S. 345, 23 a, 428ページ。

よって協業がつくりだした密集の中に、分業は相互連携を組織化するとすれば、ここに、労働のたえざる流れ、したがってまた仕事のすきまを圧縮することによる、生産力の上昇がえられる。「彼が1日じゅう同じ一つの作業を続けて行なうようになれば、これらのすきまは圧縮されるか、または彼の作業の転換が少なくなるにしたがってなくなってゆく。」²⁶⁾

以上、労働の自然力、種族本能、相互の刺激、すきまの圧縮といった内容で、人口、協業、分業における生産力的契機を述べてきた。しかし一見すれば分るように、ここまででは、資本の生産力、無償の生産力はまだふれられてはいない。資本制生産を特徴づけるものとしての集団労働、協業、分業の生産力は、どのようにして資本の生産力に転化するのか。それが一つの問題点である。そしてこのような問題をたてて、資本・賃労働関係を見直した場合、資本制生産における賃労働者につき——集団労働をなす構成要素をなしているにもかかわらず——賃労働者相互は、さしあたっては全くの相互的他者たる関係におかれており、むしろ賃労働者が結ぶ関係は、同じ賃労働者ではなく「資本」とであるという奇妙な、集団労働と相反するような、事実につきあたる。そしてここにこそ、協業と分業における労働の生産力が資本の生産力に転化する契機があるのである。すなわち、賃労働者が同じ賃労働者と関係を結ばず、したがって相互には孤立した状態のままで資本との関係にはいる以上、たとえ資本の下においては、協業、分業、賃労働者の集成は実現しても、賃労働者相互のあいだには、相変らずの相互的他者たる関係が支配し、「集成」の力は、もはや賃労働者には属さないのである。「資本家は100の独立した労働力の価値を支払うのであるが、しかし100という結合労働力の代価を支払うのではない。独立の人としては、労働者たちは個々別々の人であって、彼らは同じ資本と関係を結ぶのであるが、お互いおしでは関係を結ばないのである。……労働過程にはいると同時に彼らは資本に合体されている。……。それだからこそ、労働者が社会的労働者として発揮する生産力は資本の生産力なのである。」²⁷⁾ 傍点は引用

26) Bd. 23, S. 361, 23 a, 447ページ。

者。

ここに「資本の無償の生産力」が、協業、分業の土台の上にあられる。「労働の社会的生産力は、労働者が一定の諸条件におかれさえすれば無償で發揮されるのであり、そして資本は彼らをこのような諸条件のもとにおくのである。」²⁷⁾ 傍点は引用者。

第一章では、資本の生産力にかかわって、労働の生産性を構成する二つの要因——人間と自然——が資本の生産力に転化するとともに、資本には剰余価値と利潤が、人間（賃労働者）には疲弊がもたらされるということを述べた。また、労働力の価値と使用価値にかかわっての、人間の弾力性につき、それが資本に包摂されるとして、賃労働者の「弾力性」の喪失による、人間自然の破壊を暗示した。このような系列は、協業と分業における労働の生産力、およびその「資本の無償の生産力」への転化にふれたこの段階では、賃労働者（人間）の「無力性への萎縮」となって再現する。「直接的労働の社会的労働へのこの高揚が資本において代表され、集積されている共同性にたいして個々の労働の無力性への萎縮として現れる。」²⁸⁾

以上本章では、資本の生産力、無償の生産力を、いわば、資本の可変資本的側面においてふりかえてきた。そして、資本には生産力を労働者、社会的労働者には貧しさと萎縮をといった同じ過程の二つの側面は、いうまでもなく第一章で見た資本の生産力の具体的レベルにおける再現であった。それでは、可変資本と一対をなす不変資本的側面における資本の生産力、無償の生産力とは何か、それを次に見よう。

III

資本の不変資本的側面に焦点をあわせて、「無償の生産力」を見るのがここでの課題である。それは、さしあたっては、人間をとりまく自然、その自然力

27) Bd. 23, S. 352-53, 23 a, 437ページ。

28) Bd. 23, S. 353, 23 a, 437ページ。

29) "Gr" S. 588, 『要綱』Ⅲ, 649ページ。

を資本が充用する際にあらわれる。例えば、水から蒸気への転化、あるいは蒸気の弾性。これらは、資本が「支払わない」資本の生産力を形成するのであり、一利潤源泉となる。「蒸気機関で作業する工場主もいろいろな自然力を充用するのであって、これらの自然力は彼にとって少しも費用はかからないが労働をより生産的にするのであり、……剰余価値を高くし、したがってまた利潤を高くするのである。」³⁰⁾傍点は引用者。この点は、『資本論』の他の個所においては、「資本の無償自然力 (*Gratisnaturproduktivkraft des Kapitals*)」あるいは「労働の無償自然生産力 (*eine Gratisnaturproduktivkraft der Arbeit*)」と「無償」なるものとして明確に規定している³¹⁾。これは、自然力の資本の生産力への転化であるが、次には、加工されたものとしての自然、すなわち、生産手段における無償性があらわれる。第二章においては、労働と機械の結合による、労働の無償の天資ということのをべた。ここでは、その同じ過程が機械の方から見られ、作用しつつある機械は、いま価値移転を度外視すれば、「無償で作用」することとなる。「生産物につけ加える価値成分を引き去れば、機械や道具は、人間の労働を加えられることなく存在する自然力とまったく同じに、無償で作用することになる。」³²⁾傍点は引用者。

自然力、機械の無償の働き、という系列での資本の生産力、それは、第二章における展開を意識するかぎり、また資本制生産の特徴が協業、分業、集团的労働の生産力に主として依拠する利潤源泉の開拓であるかぎり、さらに協業、分業と相関するものとしての不変資本によって補完されなければならない。

『要綱』では、この点を「共同的作業」とのかかわりでのべている。「暖房装置等々、作業場建物等々のように共同的作業のばあいには不変であるか、減少するような出費の経済からおのずから出てくる生産力の増大は、資本に費用を

30) Bd. 25, S. 656, 25 b, 830ページ。この点を、不変資本充用上の節約という視点からとらえ、「公害」論とのかかわりを意識しつつ分析したものとしては、吉田文和「“不変資本充用上の節約”の位置と構成」京都大学経済学会『経済論叢』第117巻第5・6号、1976年5・6月、がある。

31) Bd. 25, S. 754, 25 b, 958ページ。

32) Bd. 23, S. 409, 23 a, 506ページ。

かけない。「資本はこの増大した労働の生産力を無償で手にいれる。」³³⁾傍点は引用者。そして協業と分業の生産力が、資本の無償生産力に転化することによって、資本には剰余価値、利潤を労働者に無力を与えたのと同様に、協業、分業に対応して可能となる不変資本の節約は、資本にとっての——「節約」という形態での——利潤源泉となり、その対極において、人間自然、賃労働者の、浪費があらわれる。「閉め切った場所での……同じ作業場でのこのような多人数の密集こそは、一方では資本家にとっての増大する利潤の源泉なのであり、……同時に労働者の生命や健康の浪費の原因なのである。」³⁴⁾傍点は引用者。

お わ り に

以上、人間対自然→労働の生産性における人間と自然→資本の生産力対人間と自然＝資本には利潤、労働者（人間）には荒廃をという系列で「資本の生産力」の内容をおってきた。そしてそこにおける中心的概念はくり返すまでもなく「無償の生産力」である。資本は、人間自然、自然そのものの弾力性を基盤にし、あるいは協業、分業などの社会的労働の自然力を包摂し、「無償の生産力」を享受することによって、自からには利潤を人間自然としての賃労働者には荒廃をもたらしているといえよう。『資本論』を主要素材とした「資本の生産力」に関する一考察である。

(1978年12月4日脱稿)

33) “Gr” S. 656, 『要綱』IV, 724ページ。なお, Bd. 25, S. 92, 25 a, 104ページも参照。

34) Bd. 25, S. 102, 25 a, 115ページ。